

「平凡」と「凡庸」は似て非なるものだ。前者は「良い意味」を帯びる場合があるのに対し、後者は「陳腐さ」「つまらなさ」のニュアンスを含むからだ。本書は、この凡庸さが全体主義という「巨大な悪魔」を生み出すことを論じている。

2部構成で、第1部では「全体主義とは何か？」について、哲学者ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』からナチス・ドイツを例に解説する。**全体主義を『兎とに角かく、全体に従うべし』という考え方、およびそれに基づく社会現象」と易しく定義。**その現象に見られる、(1)思考停止(2)俗情(3)テロル(4)似非(えせ)科学(5)プロパガンダ(6)官僚主義(7)破滅—の7つの特徴を提示する。さらにナチス・ドイツの幹部アイヒマン裁判の様子を報告した『イエルサレムのアイヒマン』から「政治における服従と支配の等価性」を導き、「凡庸は罪である」として、**人間である限り思考停止してはならない**と喝破する。

恐るべきは、全体主義は国家にだけではなく、あらゆる集団や組織にも立ち現れる。第2部で、いじめ▽改革▽新自由主義▽グローバリズム—など、現代にはびこる全体主義を展望する。(な)